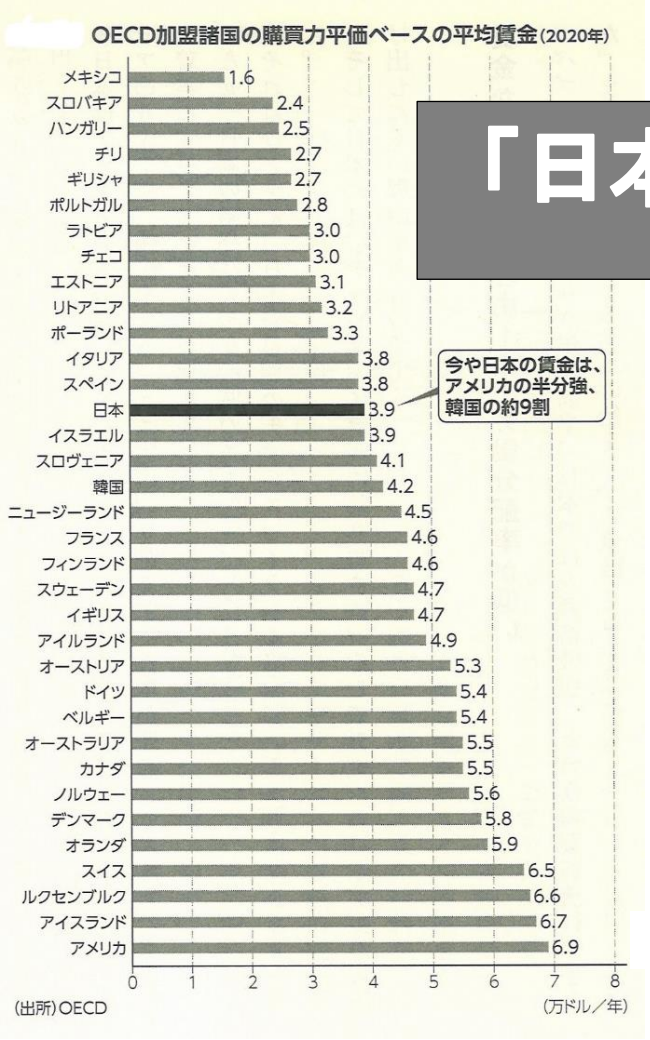
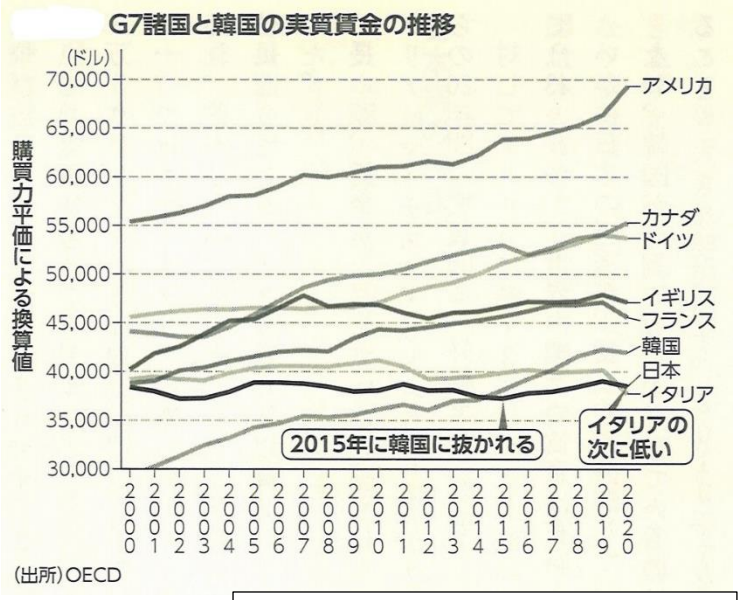
2022.7.5	図書館だより	水沢高校図書館 №5

「日本病」とはなんだ？

新しいウイルスか？





←↑図は本書より

最近「日本病」ということばが聞かれることが多くなった。「日本病」とはなにか？COVID-19 に替る新型ウイルスか？

そうではない。経済の問題である。

低所得・低物価・低金利・低成長の「4低」に喘ぐ日本を指して「日本病」といっている。

『日本病』（著：長濱利廣）はこれを鋭く分析、解説した書である。

私たちが若いころ、将来に不安はなかった。経済は右肩上がりで、金融機関に 100 万円を預けると 10 年後 200 万円になる時代であった。80 年代に危惧された国家財政の赤字も行財政改革で解決できた。何事も「明日は今日よりよくなる」ことを皆が信じていた。「気候変動」「世界の人口爆発」「食糧難」「資源の枯渇」「持続可能性」「少子高齢化」「国家財政の破綻」ということばはなかった。

仰ぎ見る空は、ただただ青くすがすがしかった。

日本は 1991 年にバブルが崩壊、その後、世界経済もリーマンショックや低金利時代の到来で停滞してきた。

日本人は停滞する経済を受容してきた。「就職氷河期」とか「リストラ」がいわれても、多くの日本人は「今の時代仕方ない」「がまんするしかない」「世界中がそうだから」として、嵐が過ぎるのをただただ待った。

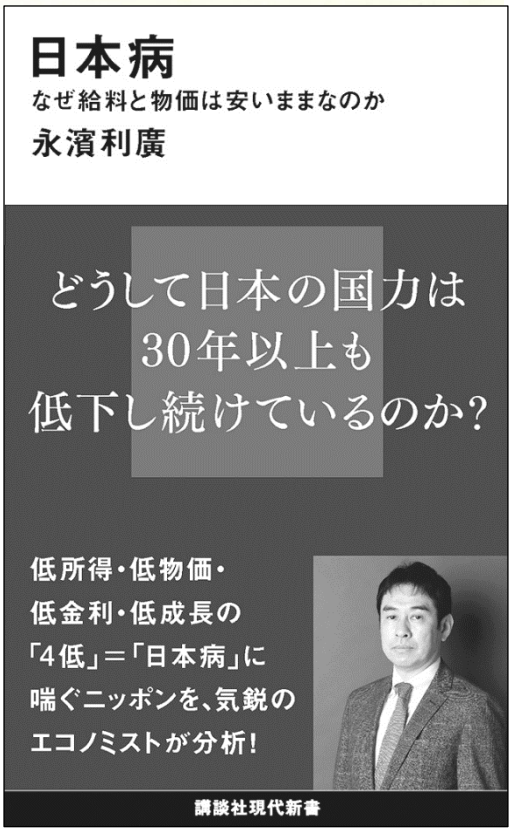
観光立国とかインバウンド需要とか、目先のことに浮かれていたが、日本は「安い国」となっていて、インバウンドの源がそこにあることに気づかなかった。

6 月 20 日、ベルギーの首都・ブリュッセルでは約 7 万人の労働者が生活費高騰への対策を求めてデモ行進をしたそうだ。デモ参加者は賃上げや消費税停止などを求める横断幕を掲げ、政府に対策強化を要求し、企業にも賃金や労働環境の改善を求めたという。ブリュッセル空港や国内各地の公共交通網はストライキでほぼ停止状態に陥ったと報道された。

日本では「ストライキ」は死語である。

皆さんが自活する 10 年後、20 年後、社会は今よりよくなっているだろうか？

皆さんは、思考停止のままでいいのだろうか？



水高図書館では
今、世の中で注目されている本をどんどん購入しています

夏は戦争を考えたい

家族の会話に戦争はあるか？

「記憶」は時と世代の変遷によって薄れていく。

そして、「現実」は「歴史」となっていく。

もちろん私は戦争を経験していない。しかし、「かつて戦争があった」ことを感じながら育ったと、今になって思う。「今になって」というのは、子どものころ、高・大学生のころ、それを実感しながら生活してきたわけではく、大人になってふと感じるようになったということである。

母方の祖父は日中戦争から太平洋戦争にかけて数回徴兵されて戦争へ行ったそうだ。出征や帰還のときの話、わずかしか生き残らなかった激戦の話を、母伝いに私は聞いている。母が経験した空襲の話を聞くこともあった。

まだ小学校に上がる前（1970 年ころ）。現ルートインホテル（横町）の交差点の北側に小さな橋があった。野菜をリアカーに積んで来て売る行商のおばさんがいたりする雑多な場所だったが、そこに白衣を着た片足のない人が立っていた。お金を恵んでほしいと、前にタライを置いていた。異様だった。

昭和の時代、その交差点に高豊というスーパーがあり、そこを中心に大町、横町、水沢駅へと広がる一帯は今からは想像できないほどの繁華街だった。人と車でいつも賑わっていたが、そこに立つ白衣の姿は異様だった。幼い私は、その異様さに、一緒にいた母に「あの人は何？」と聞いた。母は「戦争でケガをした人だよ」と教えてくれた。

「傷痍軍人」という人だった（※注）。

今は鳴らないが、広島、長崎に原子爆弾が落とされた日のその時刻、終戦記念日の正午には、市役所から一分間サイレンが鳴り、皆、黙とうをした。そのサイレンは、いつから鳴らなくなったのか。

茶の間（リビングではない）の話題に戦争があった。しばしばではないが、確かにあった。

昭和 40 年代。高度経済成長を経て豊かな生活があった時期だが、戦争があった記憶や雰囲気が社会に残っていたのだろうと今になって思う。終戦から二十数年。若い世代にとって二十数年は長いが、大人にとっては短い。

太平洋戦争から今年で 77 年。従軍した人はほぼいなくなり、私の両親のように子どもとして戦時を経験した人も少なくなった。傷痍軍人を見たのも、私くらいが最後であろう。４歳下の弟は見たことがないと思う。

そうして、現実感は薄れ、「歴史」となっていく。かつての大戦は、源平合戦と同列のものとなる。その延長に、また繰り返されるのか？

そうかもしれない。

※傷痍軍人（しょういぐんじん）
戦場あるいは公務中に後遺的な身体障害となる傷を負うか、病気になった軍人。体の一部を戦争で失うなどしたため仕事に就くことが難しく、国の補償を受けたが生活は困窮した。都会の人通りが多い駅前などに白装束で立ち、「お国のために負った傷」ということで、通行人から金銭を貰う人もいた。

沖縄本土復帰５０年 そして 730

6 月 23 日は「沖縄慰霊の日」である。

太平洋戦争でアメリカを主力とする連合軍は 1945 年 3 月 3 月 26 日に慶良間諸島へ上陸、その後、沖縄本島に進軍し、日本軍と激しい地上戦を行った。犠牲者は日本側だけで約 19 万人（軍人、民間人含む）とされ、沖縄の人口の 4 人に 1 人が亡くなったことになる。

6 月 23 日は、日本軍の組織的戦闘が終わった日を沖縄戦が終わった日とし、犠牲者を慰霊する日と定めている。毎年、沖縄全戦没者追悼式が行われ、沖縄県は休日である。

終戦後、サンフランシスコ講和条約を経ても、沖縄はアメリカに占領続けてきた。その過程では、アメリカ軍の基地化が進められ、核兵器の配備や、ベトナム戦争での前線基地の役割も果たした。

1972 年 5 月 15 日に、沖縄（琉球諸島及び大東諸島）の施政権がアメリカから日本国に返還された。これを「沖縄本土復帰」といい、今年で 50 年を迎えた。

アメリカ統治時代は、道路の通行は自動車が右側通行であった。それは、復帰 6 年後の 1978 年 7 月 29 日まで続き、30 日に本土と同じ左側通行に切り替わった、これを 730 という。このニュースは私も子ども心に興味をもったことを覚えている。

沖縄戦と沖縄の歴史にも目を向けたい。

ライブラリーストリートに戦争本を置きました。その中の一部をここに紹介します

・綾瀬はるか「戦争」を聞く

広島出身の綾瀬はるかが被爆者から話を聞いた本。戦争体験者の言葉を通して平和の意味を考えます。

・カラーでよみがえる日本軍の戦い

日中戦争から 1945 年の敗戦までにおける旧日本軍の白黒写真をＣＧ彩色技術によって、カラーに再現。日本軍兵士たちの姿、戦場の様子がリアルに伝わってくる一冊。

・マンガ 沖縄・琉球の歴史

・地球の歩き方 沖縄

親しみやすく書かれた歴史本と観光ガイドです。歴史からグルメまで、南国ムード満載。沖縄に行ってみたくなる一冊。

・沖縄 だれにも書かれたくなかった戦後史

沖縄には、日本の戦後のすべてがある。今なお日米の狭間で翻弄される沖縄。だがそんな中、たくましく今日の沖縄を築いた人々がいる…

小学生のころ 昆虫好きだった皆さんへ
夏休み 昆虫食を学ぼう！

夏休みに山や田んぼに入って昆虫採集をして飼育をした経験を持つ人も多いはず。昆虫飼育は、日本特有の文化で、海外にはないそうです。

夏休みを前に、「昆虫食を学ぼう」を企画し、ライブラリーストリートに置きました。

身近なものでは、「イナゴの佃煮」が売られているのをしばしば見かけますよね。実は今、将来やってくるとされる食糧難に備え、昆虫を食べる「昆虫食」が注目されています。昆虫食の奥深い世界を覗いてみましょう。

ライブラリーストリート

職員室から図書館にまでの廊下に、本に関する企画、新聞、雑誌を置くようにしました。この度、副校長の命名で、ここを「ライブラリーストリート」と呼ぶことにします。

これに至るまで、副校長は「street？」「avenue？」　試行錯誤したようです。